ロ 9
709
2 上

續鳩翁道話壹之下

男 武修聞書

山川の末はながれ〳〵やちがらもことおてくあそうみ瀬をとつま すべて山家まへ。米麦まぜ
しく。あらぬものを合する中に。栃の実の餅
団子ましく。合するに多し。その製法は。栃
の殻をとりて。実だけを袋に入れて。谷川に
ひたしおくこと。昔をとりて。餅団子にする
なり。今奇のところは。やがち乃実。谷川におら

709
2

まだ志川む。実とよりて。穀ぐさりせるまで。浮んで
流るまで。人もおなじことにて身貧乏病の手を
捨てずして。みだりにまかせてよみしりたると
きちえんまする。末々の自分のしようをもの。ごまには、つく
肩に此救荒中ますゆゑ。去る天保癸巳の年
五穀のみのらひ少く。甚だ凶年。飢渇におよぶ人も。
多くありし。其時さる御方の御慈悲様に
のたまふやうに。救荒一助と題して。松の皮の粉
土を合するの法を。おしやしあそばされ。板行

なりて。ひろく諸人にかどこさせられし仁
恵のありがたさは。申すもおろかなる事なれども。
百年の後も。此志の難有事を。しらしめたくおもひます
ることも。ちよつとぞんじまして。御救荒を
書き置くこそ。今その一法を。御救荒中にいたす。
其の後、飢饉の時は。松の皮を粉にしても
う。土を食するは、いかなる飢饉のときにも
多く。実に未曾有の工法で。ござりますと
どうぞもヨウ おぼえておかれませ。救荒一助の

文ふ

土鍋ゝ製法　武安医の家法なり

一 むれいづくさの土までを。砂のすなく。むめ
よさを撰び。土壱升に水一盃入。桶の
中まくまくかきまぜ。上水をとる事数へん。
まさ水一盃入。よくかきまぜ。別の桶
に入置。底にのこる砂をとり。又水一盃入。
おのごとくかきまぜ。水をひくしおく事二日の
あひだ。一日に二づんづゝかきまぜすまし。上

水をかつるなり。葛の粉。わらびの粉を。水飛
する法のごとし。右のごとく製法せし土へ。水
弐升入置。煮くらをさし粥のごとくしく食へ。
そのうへ。菜大根など切こみ。あつものにしく
煮く食てもよし。一日に三合より五合までく
らつべし。誠に此法をもちひば。五穀を
食せざれども飢ず。自然法なり。まさやうなり
とぞ

右の通。製法の仕やうを。心得めしあそばさるま

しごうござい思召。お万事をいたしまする。志しが。滅多にあるまい。それゆへしかしなどと。耕や稼その中よりとやせぬ。思ぜんがうらぬ。志し衆をはんで。飢饉をよりう。人の命を勤めて。飢饉をまぬかれうが。肝要でござりませう。平生衆耀衆勢がおまつて。天地神明のおまくしを蒙るより。運気もあらへまするが。とうく身贔屓身がつよをすて。衆業大切に勤まするもと。いはゞ

分限相応のさうゐ。いくらといふものはござりませぬ。たとへば。草木の花さへ。実のある人の家も。ほじ事じや。ほじやうに。むさきこの草木をも。大小のござりますれば。人は貧富貴賤違の。あるがゆへ。ほじ事でござりまするさかりがある。花もあるも。千草までを。花のさうゐといふ事はござりませぬ。花のさうゐ。此方の身贔屓身勝手が。やすぬのじや。身をすてうてうらむせと。あまとよんで。欲は。面白い事でわ。

ござり升せぬ所。是に付てふしぎなる事がり
有ります。おきゝあそばされて下さりませ。常州亀山郡。
結城郡。川嶋村と申す所に。江戸屋何がしと申
まして。相応の百姓が。ござりましたるが。主人若く
妻は家づきの娘。其母と二人にて。此所へ聟つうひ
の人。ある時女房壱人の男子をうみまして名を
徳弥と申しました。此子三ツのとし。次の女子出生
ます。徳弥は乳母をとりて。養育を致させました。
ころは今より十八年まへ。寅年のことでござり

升。さてかの出生せし女子は。其後近村へつかはし
ましたが。また引つゞいて女子出生。出生も絶へ
ありませぬ。先をもちまして病死いたしました。さ
まだ打つゞき。出生も多く。拠ござるの加ね
うちも続きませず。次男に備金も出来。年々
の家は。病死と困窮よりの佛ものゝ金子壱両の
借金は申ふ及ばず。田畑までうりわたし
ましても。相借金もすまぬ。女房は困窮を
苦に申まして。申年の六月病死いたしました。

乙さんぐるみなかの里さ。村うちへも申訳なくて。あすとも
嵩母も。ほかに他国へかけおちいたしましたる残り
しものは。乳母と孫やとふたりでござりました。
此乳母が子をかゝせまして。心がらのひどくしい
人でござりゆしたが。此江戸屋へ奉公に出まし
た。三年ばかりは。給金を貰ましたけど。その
のちは不埒をいたし。給金も出ませぬ。乳母の
親ごとよりは。いとまをとり帰りたくとも。
さらに帰しませぬ。その故は。此家は主人に困窮に

めり。をかしい。嵩母といふし。心得ちがい宜し
うら様だ。いづれきつうでござる。家名の後と云ふ極
御しまして。一しほ孫やと。不便にぞんじ
まして。親里へ帰りがたさつかまつり。分の衣類を。
とりかへしもいたし。今ま奉公しまして。おや里へ送
り。自分は生涯みを。とらぬやう中ゆうひぎとり
ます。江戸屋の家をとりたて引起さんとの志を
立て。親里より一札をとりし則ちこまでう
川さき村の。人別に入ました。かつうりの大衆

なれど。精進人のちからにおよびがたき事に。かゝる折から
こそ。神かけの力をかりんとうみうけく。百
里の外をわたる人。讃州象頭山。金ぴら大
権現へ。ぐわんをかけますと。ふしぎにたすかりまして。さらに
神おまく。主の家をとりかこむところぐし
とはげ。三ッの気ぞそといふわかれましても。その
わけハ。在中ござい女子のひとり住居を
もつるすなまじ。へんなふつるなんぎ。又人によりすぐ
こさがんまのさ。先中一ヶ鉄砲とふります。

其二ッは髪に油をつけずど。其三ッに元結丈長よく
髪ともぢで結ふ事をせませぬと。かくくんを揃ひて。
はるかに国元へ無事に帰りましても。ナントあり難い
忠義でハござりませぬか。此人出生ハ。門國葉郡
紀州那賀郡田村の百姓。長七といふ人の娘
じや。年ハ三十こゝろもちんぐりしかれど。又
まだうろで年をとつてもなし。忠義の為に身をこう
まはず。主の家を引起さうとの志。ヨウ考へてみたら
うじゆせ。ものゝ心うすき事でハなし。古人の

御不志な者ハ。めつたにゐる猫の大事でも。志さへ立ますると成就せぬといふことはござりませぬ。譬バ川の中まつくらに。雁まで古沼の中の魚を釣てござる人がある。是が中々命や親のいひ付で出来さるものではござらぬ。腰ぐらい水へつけて冷の入とも。疝気の発つても。飛も鞍をわすれ果て日がな一日竿をもつて。立通しにしながら。釣た魚の数をいへばたゞ一升すの雑魚十ぴき。それが。仮令や名聞でも出来るものではない。たゞ魚を釣さいといふ志からぞ。此不作が出来るのじや。是が此日。織りたひはつて志でない。平生志ごとするならば。毒ひするならば。たゞ魚つる事ばかりおもふておる。此称ともかくと忘れるのが。志じや。古人も。寝食をわすれ。忘るゝを志といふと。おかせられました。いづもようます。ほどに。人は志の起しやうと。いふ事はない。皆が志を起すならば。あのお乳母どのゝ申すに。忠孝も志をとつてまするを。わがの心さ

ちがふ事はない。筆耕あまた出来ねど、まこと
は出来ぬといふは。心がらくぬのじや。孟子の
いはく。志は気の帥なりと。ここをいふのじや。
こころざしが確なると。気はつきしたがふ
て志まよへば。人は気によつて動く。その気が
くるふと。箸一本持ともおちつかず。天下
ものとはやかになりかかるも頼ふくく。
まかすがすず。居膳そくだりかかる振ず。こし
様まなるのは。みな志がくづけるのじや。此御用

んなされませ。志がらそへば。気は引くち。女の方
でも百里のみちを。歩まはりが出来るはせるまし
ていふんや。爰の所じや。親兄弟主人にはなく
家業出精が出来ぬといふは。六尺の横幕縄
の手まへを。面目なしこまらん男のなすべかり
じやござりませぬ。夫に従ひ。姑に従ひ。家内の
とり志まりの出来ぬ女中は。舅よ嫁へ。おそさ
もね名じや。チト御苦へなされませ。こまるはいく
おのへ縁がなる。むかし豊後の国の人。郡

へより。フト鏡屋(かゞみや)の見世(みせ)さきをみれば。御母(おふくろ)が
ひかる物(もの)があり。うつぎさうふ若のぞいて。織(おり)さ
大極(おほごく)をおげ。ヤレ親父(おやぢ)さま。かなしいと。かの
鏡(かゞみ)をとらうとする。亭主(ていしゆ)きもを潰(つぶ)し。もしそれ
どうなされるのじや。イヤどうもいたしませぬ。是(これ)は
此方(こち)の親父(おやぢ)さまじや。めつさうな。それはこちの
うりものじや。十二うりもの。売物(うりもの)ならば買(かい)ませ
うと代物(だいもつ)をはらひ。かの鏡を宿屋(やどや)へもつて
さて其(その)いつくしみてを返事(へんじ)せず。それは姿(すがた)

婆(ば)と冥途(めいど)の便(つて)がありませば。かゝる縁(えん)がござんせう
ぞ。行(ゆき)をせよ。志(こゝろざし)つまらく二年目に面目(めんめ)あり
かゝるとへ。ありがたいことじやと。わが気(け)をも
志しを願(ねが)ひの通りとゆり。ひそかに
二階(にかい)の長(なが)わくへかくして置(おき)出(いで)ゆりきて二階へ
あがる。あるとき女房(にようばう)が用事(ようじ)ありて。二階の
長持(なかもち)のふたを明(あけ)てみれば。ひかるものがある。
より出(だ)してみれば。是又(これまた)女(をんな)がある。是も
又びつくりし。二階より飛(と)んでおり。亭主(ていしゆ)の

縞がらとつかまへて。あゝゆうらあゝゆう。悋気喧嘩がとうじゆうて。ソコデ塔の妙琳が守法げく。あいさつするといよくゑんまの花が咲く。妙琳も浄らくなく。ソンナラもしか二階へ往く。男ぎ女りんゐやくきませうと二階へかけ上つて。鏡と一目見て。こゝらも又びつくりして二ゐかう太殿をあげて。あまりおまへがさか。悋気喧嘩をさつしやるふ錮く。気毒や。二かいの女中が。尼は身をまもるといふて行く。女の

蓬心狂言をとしてみせる。ナニト面白い趣向じやないか。トツクリとかゝ悪しゆらうしませ嫁姑の角づきあひ。親類の中あしゞひ。兄弟いさひ。女夫げんくわ。村うち町内の附合親子主従のあひだもうちとけぬ。けんくわの仲間うちが多い。かの人の悪趣ふ「ようあのうちかゞみの新法師もしく見まする。銭すくなうやらくわゞかをかつてゐるが。学者の所作でござります。身ふ立つてつさへするべ。忠孝を

はとめこふ。さそこの乳母ハ二年に村かたへつれ。そのうちね月日をおくりますうち果して乳母が推量のごとく。あとも兄母もちり〴〵になりましたれバ。いよ〳〵志を立まして。總領をそだてまゐる。むら村かたへ。今日をうけおかれましたり。江戸屋の半兵衛がことで。その家名を継をる事ハ。一通りにへ村方へ對し。出身の半兵衛ござりますまいバ。かねて村方の乳母子へうけあづけまして銀子。年ふぐにたのみまし

のかね。利金ある銀も預り。貴方がのかの村方へ總代としてさし出し。家名お續の義を願しこ。村役人中を始その志をよろこび。とともに世話といたしはからひましたさ。勿論古屋敷へうかれましたれバ。身をおく所もござりませねども。主人ハいまだ。他國へかけてかくれ申す。屋敷の隅に。わづかの小屋をしつらへおさまりましたで。これまで利ふう人の田地田畑を。わづかの作りして。ゆんを讓あづかり。田をすさ州

とより。こゝろを蔽ひ虫をふせぎ。人の手をかゝず
しての。艱難辛苦。幼稚もござりませぬ。夜は
夜すがら鳴のうたのもしらず。朝は
起よく。来のめぐらむ迄まで。草履草鞋を洗
ひり。手を傷まれ。織つむぎ。縫針のわざをならつて。只
此児の。手足のびるを。為のしらぬ年月をおくり
ますうちにそくさ。揚孫十歳になりぬ。御らく志つも
おとうりまうち。常に乳母の側に。手仕事を
くらしまを。ようしくねじや。縫をしへ手どと。

乳母といゝそずして。たゞ。かゝさまとよびますゆゑ。
ひとへは乳母の真実。揚孫は徹すれがみえて。
おのづからうまれる。桜らじのおや里には。
老ないとし遣ましく。真実文五郎とみを小児
にも十歳あまりになりまし。此児とも
川崎むら迄ゆる。揚孫ともに一年あまり
手ならひをさせ申しく。其のちひとをとの
んぐ。雲坂へ出でもそれより江戸へ。早出ゐ
つれ申して。家に今く。実の子とよりそで

育(そだ)てゆすると。おのづから是(これ)を。疎略(そりやく)にいたす
心(こころ)がおこらう訳(わけ)と。百里(ひやくり)の外(ほか)へ。うみの子(こ)を遠(とほ)
ざかり。是(これ)を思(おも)ひ子(こ)を育(そだ)てますれ。あるひハ志(こころざし)もかう
よい手本(てほん)でござりまする。十八年のあひだ。朝(あさ)
夕(ゆふ)の食物(しよくもつ)も。わが児(こ)ハ粟稗(あはひえ)の中(うち)にある。とあり。
粮(かて)をゆせてくらべ。楊家(やうや)へハ。常(つね)に上(じやう)の食(しよく)をとらへ
させ。児(こ)ハ母(はゝ)とよぐとも。わが子(こ)ハ主従(しゆうじう)の心(こころ)
ねを。失(うしな)ひませぬハ。丈夫(とゝ)も及(およ)ばぬ。志(こころざし)でござり
ます。此(この)孫(まご)が出(で)きまして。楊家(やうや)十八才のとき。

元(もと)の屋敷地(やしきち)を買(かひ)もどし。四百(?)だけて七百乃
家(いへ)を。むかしに建(たて)させて。をかひ。極(?)小若(?)衆人
をむかへ。田地(でんち)を町(ちやう)四反(たん)とはかり。丈(ぢやう)のこゝろ
らぞ。さきに家出(いへで)いたされました。老母(らうぼ)をも孝(?)にて
極(?)ませまして。此ふたりと丁稚(でつち)共も。手代(てだい)共と。
女子(をなご)共も。召(?)抱(かゝ)へずと(ヨウ)皆(みな)でおかまいませ。
むかし。木曽殿(きそどの)とて大将(たいしやう)がありて。小国(?)旅(?)
て。平家(へいけ)と戦(たゝか)ひましたとき。味方(みかた)の兵(つはもの)中(なか)
附(つけ)く。若(?)敵(てき)がこゝ。斎藤別当実盛(さいとうべつたうさねもり)と名乗(なのる)

そのが悪ぎやう。かくしても黒とひくま。軍をへんして
坂口とゆふめし。指図せしまて。こまれ義仲。
い傍ぐ孫継のうちにありし頃。諸わけあつく寒塩
ま七ケ日中をまもりしてまする。ござりまする。
此恩をおもふて。後はふるき軍をへんしく。
実とり、敵対せね志。ナント忠節まさし恩ハ重
いそのでハござりませぬか。七ケ月ハさてかさ。二日
くらずまゐても。命がおいましても又年十年。
かぎひハ半季一年。主人の恩をうけく。その

恩を思ふぞ。うらくと身を衛手をそこくは。勿
体ないことじやござりませぬ。在所は此時の
半をヨウおひ出しくさる。着物ハ黒
りめんの紋付。裾は墨雲に鶴のもやう。ゑん
ごろは鼠色じやのを。けども又唐紅じやとし
おひ。様の申す鼻汁たらして。ゆりご雑炊ぐ
とふらし。馬屋ござを肩にかくしてわたくしをと
出まして。こんな草をくはせぬの。餌やさでうけりや。
めしは喰ぬの。広ぶんとめへ仕きせの申すでがんとも

あいのし。ヨウ口がたちまちはなるのじや。これでみると おまへがたの
妄念(まうねん)のかたまりじや。ソコデさつぱり主人(しゆじん)の恩(おん)を忘(わす)れ
果(は)て。出(で)ることのならぬのじや。おまへが此家(このいへ)におらしやるぞ。
足(あし)のすりこ木になる程(ほど)。出(で)つひかけさして やりものは
かりまへ。おまへが毒(おなさひ)としてやらずば。是非(ぜんま)がおの楽(らく)
い出家(でさ)はせまい。わしがおやしきへやらしやれば家(う)
内中(ないぢう)がみなひざる程(ほど)うつてかゝへおかでおかう
と。我(われ)もくと。身(ま)をのぞして。家内中(かないぢう)がおれが
の舎(くゐ)じや。これでこそ出(ざ)させるしがあり。さら心(こころ)の

手代(てだい)殿(どの)が。當惑(わくわい)らしくいふて。是非(ぜんま)なくうそつき。彼(かの)
どうらう髪(びん)を大勢(おほぜい)付(つけ)まして東山(ひがしやま)へ花見(ものみ)に出(で)
かけさ。ちがつたらの隠居(いんきよ)様(さま)に。おつかひがけおあし
出(で)ておひまして。ソコデかの手代(てだい)どのがびつくりし。
挨拶(あいさつ)とまどひ是(こゝ)をおゆるしなされ久(ひさ)しうお目にかゝりませ
ぬと。いひ捨(すて)て。おもてへ出(で)てみると。辰(たつ)つき。隠居(えん)
様(さま)と。つまりのみなお嬶(かゝ)あ。返答(へんたう)もせずどふ見(み)か
こうつうちへ頼(たの)みまして。掛(さて)よ座敷(ざしき)へ入(はい)つてかの手代(てだい)
を呼(よび)付(つけ)。其方(そち)は久(ひさ)しう當惑(わくわい)に付(つき)心(こゝろ)がいぢる。

最前おのおのがた縁じや。其上どこの国か。三百六十日
鼻つき合して居るおまへに。久しうお目にかゝる
ませぬとは。なんとした挨拶じやと。それ仰きま
く。手代どもが。ハイおのせうがとてつく〴〵。ぬめよ
かゝり申しては。寔は歴々が。百年目でござ
りまする事と。いふまい。ところで。この百年目が。
一年のうちに。計三度づゝ。出てくる。御用人
なされませ。かのおうじどのゝせうに。主人の家へ
往てずとも。おさる見れはりは立ずとも。せめて十

年の年季をたがさうつとめ。親請人をひきさ
出さぬやうに。勤めるといふもの。ござりまする。或
人の道理「人の子をまうくべし
雀子のちゝとゆふべに鼠子もあり。忠孝は
天下の大本。ドフジおさへはなりとも。太孝の
ともしいは。物されるやうにいてしまへ。申して これ
不孝とまで忠言とまおうし。奴状なる上は。
道に御行跡の御聞き楽しまん両年。
御褒美として。御褒多くありけれ。まうう史のとく

なれども。取に帰まして。御褒美にあづかりました。
みつかりまする。かの身をすてゝこそ浮む瀬もあれと
いふ歌のこゝろを。今さら思ひ合されて。ありがたい
ことでござりませぬか。扨も川崎村役人衆の
ことに。問屋達ずいぶん馬をとめて。たのもしいこゝろ
ござりますのに。名主をはじめ。さては博労どもの
よい馬と世話しまして。礼と申さずに帰まい
と。銀取博労のうへ。駄賃もなし。厚く礼をいゝ
たまひし。博労もまことにかたじけなき。御世話の

人はよい馬と。百文出すよと買ても買溜とも
ゑ。まことに馬ちがひして。誤て出す売ことを志ず
都て。ひそかに德付ことを心掛。さべくるの売
うりよ升く。当より徒なる人はない。数十年
博労と渡世にまらすか。かゝる年は孫しめます
じやと。人々へなうしてかまされました。又問屋
耕作の隙ゐるを。ひつく家主浦とみて
三里づりのわりへ米を付けて馬ひまする牢しが
はる。必その日はるのうぢ。一日分とりませまして

親その餘りたきなるおごさり飯を。ニツあらしく。
こまをも撫ではなりさせくつるうまのくちをうち
啄あとさ。かうらど一ツくださせまうを蒙ほりて。
蒙をおくらしるとさ。一ツくださせ吻あさ逸中
まで。乃ろる一ツを啄させよこ足のこくかざらず。
そうじか小屋住居の難儀の節まとなれ物を
わくまきもんがあつく。かるとききれど。くり
そのを餞ず半いならず。せめくその志じやと
りかふ食料の黍稗と。毎朝まくしで。小鳥を

鶉さ、ほとかくみしじや。古歌ず
「山鳥のほろくとなく声きけば父かとぞ思ひ
母かとぞ思ふ。これハ行基菩薩のお歌とやく
ほくへまする。いかさま一さい衆生を救ふとし
ての。大慈悲心より。およくなされた歌すれば。
中にもおかうらる事くござりますれど。中
まと。父かとぞおもひ。母かとぞ思ふとハ。指別さ
ありがたう。おんぞろがござりまする。今来のお
乳母どの。慈悲心会得ばかりを。おひましまする事

其意味をぞんじませねども。みすごとり
ことに主人の家を引おこし。其父母を敬す。
忠孝の志乃ありがたさハ。仏菩薩のむかし
りしとやうさふなぞうしハすれ。けるまいとぞんじ
ますと。孝経りしと身とそ道を行ひ。名を後
世に揚るとハまちや。お床ふけお乳母どのを
わんおそひさいそのでござりますと。抑宜子文ゐ。
ことに文右かとなしく奉公し。去年江戸表
より。初心とく。侍奉公あとく。松坂におち付

ゆく。夫より母をよびよせ。川さき村へ参りま
しき。暫く逗留して。又松坂へ帰りしハ。
両宮へ参詣とする事なれバ。茶屋をもせず
に拝礼させうと其用意として。あるじの中を
まゐるハ。文右衛門ハ。御主人とこのんで奉公さ
出しとよ。よふはせけ。わかりけ。わがあ
ほうらぬ年じやうろく。いまだ及ども。ところ
格別大切の身なれバ。奉公ぞかりそめならと
うかくせぬど。縁わり女などよ。かうるどわそさ

なる年は。あらませぬぞ。わしや。病ひでゐるゆゑ。身に
孫の為く年が寄ろう。爺の家をはなれしや
るまいと。恥を書くとも只そのぞれはれ。返すべくも。
身を清浄して。三従をまもりや。この乳母は。
待は其日の為まど。さうさが身持のわるいを
と。五倫をさへしらぬと。われは内く知ります
ぞ。ゆめく忘まいぞ。恃しんで三従をまもりやれ
と。親に。孝行を尽まいと。女子を。孫の
道くござりまする。乳母さ

「なるほど孫の親の俤りとならひそうな。心がゝり
なさせまするとじやぞ。此頃のこゝろに無ひく一
しれあらばこそ覚てまする。此ころまで孫を
そだてた事なれども其人がら。ことやさしく。柔
和らしく。頭をよく。在中の癖なれども。なるほど
人は男も女ども。夜もよふすがら。このたびまでも。
孫まうざらく。一夜も絶へたれどもひとふまでも。こま
全く。乳母のきびしく教へ育てし因ぞ。篤
実にあひなりまして。さりとも乳母の厳粛

なりおいりますが。却て秘蔵に織る人も間あるよし。
寔しますゐ。志してゐる人全く。誠の心を志しぬ
田舎じや。まづくはし一条ハむかしの筆でもあく。文
唐土天竺の筆でとき。現在まで今の筆
で。志ると私が志てをり和人檀家まも字さ。又
その小はくりの人まとどうけまわり申さるじや。
ことをおぼうしやすまん。どうぞ。ゆるりひわり。
この志をよ本とし有く。旅の中を肴。紐
うしりない柾ま。かんをみづさといをのぐでござり

ます。客人の詠り
「この人のりしの心ハますかゞ。みなハなどの
くわりありござさ。拙者ハたんおもてしやまさ

下巻

續鳩翁道話　二

續鳩翁道話弐之巻

男 武修聞書

湯の盤の銘にいはく。苟に日々に新にせバ。日々に新にして。又日に新なり。これハ大学の傳にして。民をいましむるすぢを。述しものにてござります。先湯の盤の銘と申ハ。昔もろこしに。殷の湯王と申たてまつる聖王のおはしまして。其はじめハ小國の君なれども。御徳の盛なるによつて。諸侯推て天子

とおなりなされ。殷の世六百年の基をおひらき
遊ばされました。かくの明君なるゆへ。後の世
このかゞみと常に御手あらひをさせらるゝ盥り
へ銘をほりつけさせられしを。湯の
盤の銘と申ます。苟に日に新にして日々に
新にして又日に新なりとは。夜昼もわすれず人は
天よりうけたる。固有のほん心とて。明らかなる
徳がうまれ付てござりますれども。利欲の
ためにおほはれまして半ばあるは人の

己のからだの気儘ぞ。いかほどよきも。よごれ仕着すと
あまりで垢づく。されども行水して。あらひすゝげば。
もとのごとく。気儘になる心をも捨かぬれば。また垢
づく故に日々にあらひきよめ。垢をされば。心
も己は気儘なりかな心も素のごとく。一たび利欲
にくらまさるゝも。ゆゑ自らかへりみて。心を尽
あますとつとめ。日々に思を怠れば。なんぞあらひ
すゝげる。徳がのびつゝ明らかなるぞ。大きく
国天下をもおさめ。小さくいへば。家内をもおさめん

ゆゑに。此道理を御發明なされ聖におなりなさる
まされて。志しを眞実にかけさへなされば。
苟に日々に新に。日々に新にして又日に新
なりし。お志しを起さるゝものじや。是れ殷の
湯王天の明命を。かへりみ給ふ。實なる事でござります。
これが聖人の御勉強でござる。かやうに自らおつしやる
まされるに。然れども何とも存ぜずござると。
頭学の上なぜいらんな極に。どこへから得つくと
いふてもなく。いちらうではコツリこちらうではコツリと

鼻をつまんでも。いつまでも恥しいともおもはぬ。その
くせ豚肉と叱まして。無理むたいに治めうと
するが。ナント情ない事ではござりませぬか。まづ
人を治めうと思ふて。己が本心を明らかにせいでは。
不埒ながらその手ではおさまらぬ。きまじく本心を明
らかにし始めよ。ぞんざいなるつかみごと。又其後に
捨ておく。ヨウ考へて見らつしやりませ。朝起て寝て悪
精進のさんとなりまする。ほうろくやうなる。その日
一日をまづ無事に。お互ひに勤めて参ります

さんは塵がたまつてある。それをとりて捨置て。その日もあすも掃ずに置くさかい。十日ばかりも一分ほど塵がたまりますぞ。人の心もまた是とおなじことで。たまく一日怠んでも又跡を捨ておけば悪黒によごれてしまひ。性の塵を見て出すさうならしません。よつて毎あさからを払うても。三所に。せりなどいうて掃除すること。といふて間にすまぐないよけいなことなり。とても掃除をするなら。丁寧になさりませ。少しも怠らずにせよとて。心の掃除をするき

まして。障子ばかり払うておると。かへつて間違が出来ます。夫で思ひ出した話がある。先年摂州へ下りました節。或人の話に近所に茶屋の人があつて。其の内に二階造の數寄目の座敷が。建ましてむつかしき天井に。つき上窓。宗匠のこのみで。新極ざんぐりと出来あがつて。ソコデ茶屋が其をいはひ表具屋がこしらへ障子をするやら。手離になると。それからは下女を人と小ものを人につけて茶羊づりの仕入。其外種々けたのよもふ。かくく

掃除をさせ申した。さて〳〵きらびが出来ると至ぶ
ぞんぶんをせしまして ナニガ其森まふへと其の業よし
ゐまとハ中々ならいなけまでも。あつじ中々合点せぬど。
夫から出目の梯を出して。薬子のさん乃すく〳〵と
のぞきまわり。此梯子掃除の仕やうで。ドフやらの
出来るとのじや。かまど居るにある。掃除道具を
取くさい。ドフデかまどがせどとべ。埒があくまいと。めつ
ゐまく此をまへさらく。小者ハ心得。一の梯を取て
くるを其中より掃除道具をとり出さして。

又まべ。竹をほそく削て魚ぐしとえるやうなりの
が五本。箱雑巾が一ツ。寒竹ハ。小さな火吹竹が
五本。ナント めづらしい道具ぞそじや。ござりませぬ
給。どうするとてまべ魚串のさかな。箱雑巾を
まさ。薬子の横ざん一本で。叮嚀にふさ。燭くハ
かの寒竹の火ふき竹で。フツ〳〵とふきまわり
とてる気のどくなものじや。さて掃除仕舞く。
それぐ気がすんだとひんさぐと墨をとりよせ。
席のまん中ふすわり。そこくを眺てまく〳〵

おもふに。をりから時刻は四ツ半すぎ。ひだり縁の
席から窓まで。実かげ窓から。日がさしこむ。なくわ
にまどろ。縁に小ぞのと叫ぶ。横町の桶屋へはい
く。揺の一画筆を。みて出ていくる。小肴買て
大だらひを。まさかりに持てくると。コリヤくそぼら
ふおくみ。井戸の側へ持て往く。切るまで。肉を
ちを。庖丁まするも。くつさりと。かしつく。ずいぶん
こまかに水を一ぱい汲てき。長上と手早にして。
この料理の上へ。ソツト持てこいといふる。小肴

心得て。その通りにして持てくると。コレさわや。己
が居間に。かけてある朝鮮うつしがある。あれく
おやま。下女が団扇をとりてくると。主急ぎて
流れ出る。あつだらしく。かの団扇を引さげ。
なんの水べんぶり実もてて。案のうちのと。提
なびつ。かの日のさしこむ所へわすれ団扇とさし
出し。よく扇げりかへおろしより。内をひくやうに
してみるに。汗をもうのじやと扨やりへず。実上
窓から。さし込日影に一面にうるる。ほうりかん

これが手にかゝる日にや。その後をとるに分別じや。
ナント めづらしい掃除ずきじやござりませぬか。是
みな心の掃除をせぬ。気随気儘が増長して
味噌汁がちやぶ台へあがり。此根性がかん癪をおこり
なりまする。その心が。家内を治めうとしても。一ツも
おのれが思ふやうにならぬ。女房が気が立つて
どうもならぬ。亭主どのが。気が短うてどうもならぬ。
手代がのろくで。どうもならぬ。丁稚は目を明いてゝ
どうもならぬと。小言八百のならべる隙がない。ヨウ

おくやうじゆせ。ちよ根よめんどう。どのやうな
ことが出来るぞ。小の月も大晦日はまれし。気の
短いは耳へ入るるんぞにそうかを叱り。
おのれが下うに。面白ずいうまれし付くへ。此うは時
節よ正月がとそるの無。寝所から起させ
折く。なぜ今の下さき付ぬぞ。何をしてもグズ〳〵と。
年寄に火の升とまでぞ。埒のいかぬ事じやないと。
日がな一日。小言いふ。此事が。ちつと中うたり。
女房も気がみじかく。息子も嫁も短気となり。

手代(てだい)も丁稚(でつち)も。せくしうす。飯(めし)くれ女(をなご)までいつついて。おのまとほぐ起(おき)よおつさうら。ぢんみそのくござりませうから。夜(よ)る夜廻(よまはり)まうら。門(かど)の戸(と)引(ひき)あけ。表(おもて)らくくかう。飯(めし)焚(たき)くせう。家内(かない)中(ぢう)がそろうと台所(だいどこ)へ。気(き)のせく御(お)ぬ。飯(めし)をてげつく茶釜(ちやがま)の下(した)をらけうる。土瓶(どびん)をうちつる。たつて壺(つぼ)へひつくりくんす。悋(りん)の年(とし)へきく一年中(いちねんぢう)。嫁(よめ)をさぐらし。是(これ)でよろそうそので。ござりませう。ヨウ おつくくござりません。女房(にようぼう)へ女房で。気(き)の長(なが)いゝまれ

ます。師走(しはす)でも。正月の三ツをおつかうあ。顔付(かほつき)しく。こちの旦那(だんな)どのゝ相(さう)よ。気(き)が短(みじか)うて命(いのち)もせぬと。なまるそのじやまない。是(これ)で辛抱(しんばう)がなりぬと。小言(こごと)ばかり。女房(にようぼう)の出あへか。亭主(ていしゆ)も男(をとこ)を奉公人(ほうこうにん)もうち揃(そろ)つて気(き)が急(いそ)がうて中(ちう)く留着(るちやく)起(おき)くわかりまぬ。亭主(ていしゆ)へは丁稚(でつち)とのが。小便(せうべん)が出ました。ふ。戸(と)を明(あく)ると。か門(かど)女(をなご)が寝所(ねどころ)へすつぽんのゆうに。首実(えびつさご)出し。モウそろそろ。家内(かない)を起(おこ)しゆせうぬといつて。旦那(だんな)どのが手毎(てごと)まくら。室(ひろ)

ことなればこそ起(おき)く。どうするものじやといふて。下女(げぢよ)めがいぬるわで。一向(いつかう)夕(ゆふ)やら一緒(いつしよ)ぢや。茶(ちや)の下(した)を。こちら付(つけ)ませうといふ気(き)でちやトント仕舞(しまは)れるものじや。まづく人(ひと)の気働(きはたら)き。色々(いろいろ)があるぞの色々(いろいろ)があるのぢや。ちやうど家(いへ)がたてまするのじや。惣(そう)じて大工(だいく)どのゝ家(いへ)を建(たて)るに材木(ざいもく)の長(なが)いのでも短(みじか)い斗(ばかり)でも。家(いへ)へいらぬ。人の家内(うちうち)も。それぞれ気(き)のみぢかいも。長いも。偏屈(へんくつ)も理屈者(りくつもの)も皆(みな)入用(いりよう)じや。志し。ひとつ〆括(しめくゝり)がないとまとまらで。ろくろく治(をさま)らぬ。それをあの嫁(よめ)の子(こ)が四めん人

よく。三味線(さみせん)の連弾(つれびき)をするのはおなじ調子(てうし)ぢや。同じうちを。同じ手(て)で弾(ひい)てゐると。やかましい斗(ばかり)で面白(おもしろ)うない。一挺(ちやう)はカンで。ひとりはオツで弾(ひく)と。音(おと)どのちがふて面白(おもしろ)い。そこへまた琴(こと)がゆり。胡弓(こきう)がとりあ太鼓(たいこ)つれて。笛(ふえ)まで入(い)る。色々(いろいろ)の音(おと)が混(まじ)るほど。ひとく離(はな)れ。おもしろうなる。志し二つ三つが三分(さぶ)りか。調子(てうし)がひとつにきまつてゐると。其又せりまゝしいものぢや。とんとつまらぬ。故(ゆゑ)に。聖人(せいじん)愚(ぐ)を出(いだ)し。金石(きんせき)絲竹(しちく)革木(かくぼく)匏土(はうど)の

八音をとゝのへ。とつてみるなといふはすでにござり
ますなり。太立の家と遠きにあらず。曲尺とふてとまりが
なり。琴三味線のつま弾き。調子とふてよきまうが
ある人のうちまでと親太郎とふてきまうかなると
絃もちもうと。立合ようおゝきまかをのじや。むかし
浦去ぶ。目ぐらと詮年と蟒と。三人常に交つて。
酒を飲むもて楽しみ。盲がしてひだ。くるりが拘まどり。つ
んがかららく舞へ。いかとさま仏のこと人が。さて
そうの在中に。太年がおつく。人多く

きうさざ。太かよくしとつが。盲一どんは字付ぬん
とせうに。劣角が志まるを。くるりは火の手をえ付
くるで。纓めげぐらつすなしに。その毒や詮年は。
太年のうるは尻ひけて。めまへは逃んともせじ
既に三人。必死の劣となりけるとき武人かけ付て。
まづ目くらに。纓めげを負せらうせ。詮年さ
目くらの手ひさをさすこし。接は脊中うし。詮年
は劣角を。指さしてつんせる。詮年は太年と合点
してめくらの手をとり出ると。盲は劣角は

しかれども足ハ拙者なれバ。いつまでも履ふくはたん
ぼうをひかれく。それく乞きをのがまでて。武先生の
話でござります。これが至おもしろい事じや。気がう
つろひで家門が治まらぬハ。主人が気の出ずる
おのれ勝手のしや。御用心なされませ。此の事ハ
みんなおの身の育。主親のいふ事ハ耳まつてのみ談話仕付
ぼしひのこし接。まうするとせんふいつとのぞ
ござります。丈でをもつぞり。おまかしく家門の安を
味り渡し。心をつけてをも。家門が治まり

治まりませぬ。治まらぬ筈じや。主人も家来も女
房も子供も。親大切と云ふ綱が。さつぱりきれて
よつて。面白うないのハ。志まさとをでござります。
まつたく。本心のそこよりよく。己が修まりませぬ
のじや。身が治まらねばこそ。家内が治まらぬ。
どくん心の洗濯が大事じや。家内のせん
ぶくに。絶まがあると。心の中に棒ふり虫が
生れます。又心のせんぶくに。間断があると
腹のうちに。いろいろの虫がわいて。肝魂どのを

奥さまも丁稚(でつち)も下女(げぢよ)もボンくといふてゐる間(まへ)ゐる。
まづ仁(じん)に。世かいの人が笑(わら)ふて見て。我(われ)ひとりかしこく
こう覚(おぼ)えてゐる。わが身に気(き)のつく人は。善人(ぜんにん)のやうなり
也。我気(がうき)につかぬ人は。悪人(あくにん)の様(やう)に見えて。我(われ)を
おかすものハ。経済(けいざい)とハ云ひながら。わるよかる心(こゝろ)よく。
我を毀(そし)るものハ道理(どうり)と知りながら。かろく眼(まなこ)を見る人(ひと)
きらひ。人(ひと)の能(のう)あるを猜(そね)み。人の仕合(しあはせ)をうらやみ。人を
こまらせ。おのれを高(たか)ぶり。おのれハ正直(しやうぢき)をいひおとし
く。髭(ひげ)でも身繕(みづくろ)ひなどして。こゝまでみる

心の凡俗(ぼんぞく)のこんまりとした虫(むし)じや。桀紂(けつちう)に沙汰(のぶん)ハ
なりませぬ。堯舜(ぎやうしゆん)ハ性(せい)のまゝなるに。湯武(たうぶ)ハこれを
反(かへ)ると孟子(まうし)も仰(おほせ)られまする。堯舜(ぎやうしゆん)のやうな聖人(せいじん)ハ。
うまれながらにして知(し)り安(やす)んじて行(おこな)ひなされまする
別(べつ)に修(つし)まつぐるでもなくそのまゝに聖人(せいじん)じやゆへに
湯王(たうわう)にいたつては。日(ひ)にあらたに。日々(ひゞ)にあらたにして。
性(あくこ)はつしるをかゞる。修行(さえま)なりうして終(つひ)に生(うま)れ
つき君。明徳(めいとく)まさる。ゆへ聖人(せいじん)とおなりなされた。
さるによつて書経(しよきやう)に。その徳(とく)をほめて。誠(まこと)に湯(あさぶ)ハ

噪がず。人は無し。縁いん半をわすれど。身を捨
むるふ。及でざるがごとし。うるを見まず。ひとへに
明命をかへりみて日新の功を。おはなくうきたり
ちがいえない。況やめいくどもが。教るもようじに惜を
もせども。元性を乱ましては身が付なんだ。わくるまのに。
なしぬ。名でござりますしは。拍子鏡にようかめる
のへ。平寛細かうしの。くせ付じや。障子をゆぶり
さねど。虫をちまになるの。叱られ虫が出るのと
きゝ怖がらせ。癖が付く。賢人のうち。人の

異見もきかず。人が常の振はなしぬとのつてはつかん
しやくを起し。我ひとりかしこうて。はらたちもなし
そのくせうまんねに。はやまれんをたよん我儘仕
くる年は。我儘よりもつよい。厳家のかゝはへ厳
を去ますといつて。柳かより。厳しい教は善つて
子を。厳しくいふのは去しぬ。元候をのぞ職は
ふめ無さるとすると。遠慮して相ばへすつこんで。
這くるりの振をみる。是こそ親和するに
まおおく。倅まいつて。可愛くの。らんがゐり

して。育あやまりしや。人の子ハおとなしくするも。人く
なること。それそこらのハ。分ひつたうハ荒妻
とまけバ。荒妻が出来るふ。妻ハなけまとよる。こりや
そつき草とようさまぐに手のまゝをせるバ。実が
いかぬ。人の子もこまとをほしいまゞに一ツみ離しまして。
おへもせず。捨そだちよ育て上く。くらし人に
なしぬと。山ごとのハ。手理まとのでハござりませ
ぬ。死。かゆうぞ大病人へ不便が仕まくハ。織ぇ手
みすい出来ず。からよむてハきかしひなりどうして療

治とせうぞ。幸よ先師石田先生が。ひろめおかれた心
学ハ。無学文盲でも。出来る学文じや。一ツ。心
をぞんじなされ。生れつきよ手理のなひ事を。
ありますれバ。手理のなひ心を手がけうして。おぶさと
いたしますれバ。そんさうおうの御ぞうさが出来て。人の
あしらひまずる。ドフゾお手よりで[illegible]と
なされて下さりませ。かくもうしますとて。文字ハ
いらぬとまうすのでハござりませぬ。[illegible]力
あるとハ。随分文とも学ぶよう。そえてまゐりますれバ

御隙(おひま)のない方は。なさけ相応(しょうおう)を。おもふみうちが宜(よろ)しい。
志ある銘々(めいめい)どもは。親(おや)たち人へ法(ほう)へ日用(にちよう)が追(おひ)
まはされ。今は損(そん)をみませふともだ。中々(ちうちう)世帯(しょたい)と。
よんどころ御隙(ひま)がない。されはとりつて学(まね)ぶげなを
なかりまでも。前方(ぜんかた)にさとふ心学(しんがく)でもして。せめて悟(さと)
斜(ばかり)の手段(てだて)と。せめかうまでもなきは。我(われ)と
おもじ中すまい。御隙(ひま)のない。お尻(しり)へ。おすゝめ申すて
ござります。上(そく)おち時(とき)を志すのじやの宜(うへ)にしや。宜(ふ)千
ま輪(わ)まつくも。物(もの)はなくとも御(じょう)話(わ)がちがふて

あるくじや。人参(にんじん)は結構(けつかう)な薬(くすり)でござる。二階(にかい)からおちて
目のまはつたも間(ま)に合(あ)はぬ。浮世(うきよ)のせわしい町人(ちやうにん)衆
それよい徳(とく)でござりますがすなほ(さう)でござります。つさりまする
一ツはうまくてゐるとのがなくて。心(こゝろざし)がなくば。とまさま
外(ほか)へ。おもしろい話(はなし)がある。眼(まなこ)さめて。心が字(こゝろ)まされて
下されい。さるお町内(ちやうない)に憎(にく)まれ振舞(ぶるまひ)がござりまして
十二ガお年寄(としより)をそしめ。町役(ちやうやく)家持(やもち)の人々。一ばく(ぞう)
座(ざ)まつさまするとさゆくの悪党(わるもの)がおつ時(とき)かの
年寄(とし)は酒(さけ)しづて。浮世(うきよ)の鶴(つる)などを酔(よ)く綺(げ)の下戸(げこ)

じや。坐中(ざちう)を目(めぐ)らすさのみが返座(へんざ)なされてかへり
まうし。亭主(ていしゆ)方が気(き)のどくにおもひ。か年寄(としより)がさねへ
御酒(ごしゆ)へめし上(あが)ても。御返座(ごへんざ)よござりませう。チト御菓子(くわし)
なりとも。御肴(おさかな)あそばしと。雲泉(うんせん)の古渡付(こわたりつけ)の
盃(つぎ)に。大(たい)まんの金平糖(こんぺいとう)をつまんで。少し羊羹(やうくわん)のあへ
わくらる。坐中(ざちう)もまたいはんおもしろ付(づき)ひしまお
菓子(くわし)よと。目上(めあげ)つるまで。すゝめまして。年寄(としより)もつまう
いかなし。志(こゝろ)ざし頂戴(てうだい)といたしませうと。盃(つぎ)を膝(ひざ)へ引(ひき)
上(あげ)ゐ。手首(てくび)を突込(つきこみ)しつゝにおかしきしむ中うかおかへさう

無理(ありり)に手(て)をさし入(い)まして。つまみ出(だ)しなさるゝ手首(てくび)を
がつまりしわけませぬ。それぞして抜(ぬけ)かぬといかうくよ
こし出(まへ)して見てをも。引(ひつ)ぱらくまへてをも抜(ぬけ)ず。ゆるりして
居(ゐ)るうちと。側(そば)のものが見つけて。どうなさんましたぞ。いや
手(て)がすこしつまりまして。ぬけませぬ。ぬけませぬと。
まうされはめくいる。夫(それ)は気(き)のどく。私(わたくし)が盃(つぎ)を持(もち)て
目(め)ませう。手を引(ひ)つ手(て)をもひさうさんしと。一人が
もつふく出(まへ)し。盃(つぎ)をつまんで。つもくへ引(ひく)と。年(とし)よりハ
手(て)をあへひく。手首(くび)にありやと。引(ひき)あへうらぬ。気(け)

清と言尾谷が。出る戦をする相なし。此中の一日
かゞろと笑て。年寄は中〳〵笑ず。涙をながし
てござるも。よんでのけませぬといふ。サア是から大
騒ぎとなり。医者どのをよんでこい。難波骨つぎ
でハないかと。河原崎の無量も来果ましても。時に
此人組が一人すこし出て。いふまゝも。お騒ぎなさるな。築
にけこまわつてるすがある。むかし司馬温公といふ人
幼き時。大勢の小児とあそびに。大きなる壺のかたわら
に遊びましたが。一人の小児。はやまりて。その中へ
おちりましたら。大ぜいの子供はこれをみて。にげ
ゆきしが。司馬温公壱人は。ゑんりよなく手ごろの
石をとつて。かの壺へ投つけましたれば。壺がわれまして。
その子供は。ふしぎに命を助かりましたと。或人の
話じや。今のお年寄の御難儀は。その話をヨウ知ておる。
いさや我等が。司馬温公となりて。たとへば其の古染付
の壺が。見れたと思ふ。うまく今のおかげも。お年よりの
智恵がみへて。まあ。あゝ損しても。其ものをぶげ。
むかへまするまで。年寄は気のどくさうに壺をさぶ

つぼをつき出して只一ト打ちに砕く。十二が雑用ハ
金米糖がちらつく。骨をうしろ振になると。ヤレお
年よりが。御りきをさつと其手をさしのべ。のけぬして
雑作なき。金米糖を一ツつんでみてもらふウスを
じや。ナント。おもしろい話じやござりませぬか。はんじものを
よろしさへすれば自由自在で。手ハぬけるものを一度
つかんだら。首がちぢまりてから。離しますまいと。かくと云ふ我
みずから付。其まゝくりかへり自由自在の。大安楽が出来
ぬのじや。うくゆせば。雑作の手ハぬけますまいに。

つかむものハ。是ばかりでハない。器量のよいのを摑む。
りこふをはきて。ゆけをしまとつて。家がらを
はくて。先代のよいのを摑んで。離しますまいとつぎ
うちらは様く義とても手もあぶれ。楽をする
手をなくしても。出来を。随分きうくつ癪
気おそへとり。顔をあかめり。酒のんでまぎらしまう。
さりとてハ。気の毒なものでござりますと。壺をつく
仕舞ふてしまうたハ。なまへても詮ない手じや。身代の
壺をとらぬさきは用心が肝心でござりますまいか。それでも

わが本心(ほんしん)は。あきらかな。明徳(めいとく)ハ雲(くも)かゝりハない。洗濯(せんたく)するにハおよばぬと。思(おも)ふ人があるものじや。これとさ(こまご)よくてやりまするま。私(わたくし)の申す目(め)くらが一人旅(ひとりたび)をして。心安(こゝろやす)い越後屋(ゑちごや)にとまり。あとの朝(あさ)ハ七ツ立(なゝつだち)をさしく起(おこ)されと頼(たの)む。亭主(ていしゆ)も心得(こゝろえ)。朝茶漬(あさちやづけ)をくはせますると。目(め)くらハ旅(たび)の支度(したく)をとゝのへ。杖(つゑ)を持(もつ)て。出(で)ようとすると。亭主(ていしゆ)がいふにハ。まだ夜深(よぶか)いで。挑灯(てうちん)をおつけなされ。おかしまうしませう。何(なに)といはしやる中(うち)。盲(めくら)が提灯(てうちん)をとつて。何(なに)をする

ものぞ。イヤ〳〵お前(まへ)がたハ入(いり)ますまいが。くらがりをとぼ〳〵。お出(おいで)なさると。往来(わうらい)の人が行(ゆき)あたりまする。丈夫(ぢやうぶ)に挑灯(てうちん)をお持(もち)なされと申すをじや。成(なる)ほどさうじや。私(わたくし)ハ盲(めくら)なれども。目(め)あきがたくさんある。さうならおかしなされて。挑灯(てうちん)をさげて。行(ゆく)事(こと)五六町(ちやう)出(で)ましたら。むかふから来(く)る人が目(め)くらにふれると。目(め)くらのまへ。ソコデ大(おほ)きに腹(はら)をたてゝ。おのれ突(つき)あたるやつハ目(め)くらか。向(むか)ふの人も癇癪(かんしやく)おこしさそり。おまへハ盲(めくら)でハないか。そちらからおのれこそが。どこ目(め)

くじや。イヤ／＼おまへハ盲じやけれども。人がハ月
うしろ。おのれが目くらゆゑ。きまうて向ふの人も
いらく様くし。おまへを盲といふ證拠ハ。なんぞ覚
があるかいのれ。其覚があり。おのれを盲といふ證
拠ハ。このわけわかる。挑灯が。おのれが目見えん。わからぬ
じやないかよ。ズツトさし出す挑灯の火ハ。中屋を
出る門口。座頭よこたえて仕舞てあるナント気の
どくな盲でハござりませぬか。火もともさぬ夢
くろな。挑灯をさげし。是であるかしらし

おかりぞめかハ本尊をかんがへて男物手心を。
かんじやうしても。お出し洗濯するとも悋しも出して
ぬるいヨウ似たものでござります。どうぞお寐ひ火ハ
消ハなんと月にて吟味がいるなどをごろう
ますと　休息

續鳩翁道話

三上

續鳩翁道話三之上

男 武修聞書

詩云邦畿千里。惟民の止まるところなり。これはこれ大学の傳に。商頌玄鳥の篇を引く。經文至善にかゝりまするの文を出しましなさるゝのでござりますと。先づ邦畿とは。たとへば山城大和河内和泉攝津を五畿内とて申すものぐ。畿内は天子の御座所。千里とてこれ廣さをさして申します。惟民の止る

所（ところ）じや。かしこもやまも。天子（てんし）のおましまする所（ところ）と。都（みやこ）と
いつても。天地（てんち）うるはしく。四方（しはう）へ通路（つうろ）よく。往（ゆき）かひの不自（ふじ）
由（いう）なる事（こと）なく。おのづから風俗（ふうぞく）もやさしかるべく。万事（ばんじ）に
つけて。便（べん）よければこそ。人多（ひとおほ）く集（あつま）りもする。止（とゞま）るといふ心。
東西（とうざい）へうつり住（すん）で。王（わう）へ動（うご）かして申す事じや。これは
此詩（このし）をおひさうくらるゝ心（こころ）は。人の本心（ほんしん）をもつて明（あき）らか
まることのなれば。是（これ）は志（こころざし）ともいふ。君（きみ）に事（つか）へ親（おや）につかへ。
夫（おつと）に仕（つか）へ。目上（めうへ）に仕（つか）へ。世間（せけん）の人にまでまじはるま
でも。力（ちから）をいれませぬ。自由自在（じいうじざい）なれば。此（そ）より

らくましとの。おぼしめしで。ござりますと。あるとき至誠（しせい）を
とゞまるといへば。その至善（しぜん）は。私（わたくし）のまじらぬますれば。
孝弟忠信（かうていちうしん）。禮義廉恥（れいぎれんち）。そのたぐひを。いろいろとす
まるが。啞（をし）がものをいはんとするやうなものじや。人に對（たい）して語（ごと）
られませぬ。志（こころ）が行（おこな）ひとなりて外へ出せぬ。さりとて
押（おし）やさうなもきぢやうとしても。搾（ちう）りとのぞいてござり
ます。又鈔（ぬく）やうとしても。合点（がてん）しなさそうな。行（おこな）ひもしれぬ。
こまかくとみるやうにすもの。私（わたくし）と。おりんべ。先師（せんし）
堵菴（とあん）先生の御歌（おうた）に「こゝろとは。いかなるものの

しるぞと。味噌を擦まへば味をしる。と申して。たとへば。長吉どのが番藤をしてゐる男とも。しらねど。女とも志らず。俺も拝てゐるとも志らねど。なんと志らねところへ。旦那どのが。コレ長吉とおよびなさると。其家の下からハイと返事が出る。また おさよどのが。長吉どんと。呼ぶ声の志たに。ヨイと返事が出る。このハイとヨイとは。何ものが分別しく。返事を志まけさ。チトかんがへながらうじませ。味噌を擦まば味をしる。志ると知る

とござる。何ぞ志るらしいものが。いろ擦ま。安くますまいど。なんと志るらしいものハござりませぬ。又おといふぞ。何もおつて以合点なさるまいど。中〱さやうなものでハござりませぬ。新治あるともなさる。合羽ハ世ござりませぬ。只ござあるといふて用が勤まるのでござりますも。心ある中でえません。赤子の生まれおちる耳。只算虫をみる様く。ちいさく動くなり。目もみ縮ず。さながら耳も安くませぬ。とどうかおい

いたしまず。そこでホギヤア〳〵。此ときは知恵らしいものも。
分別らしい物も。何もありはいたしませぬ。
さうすると母おやが。乳ぶさをあてゝやると。赤子が舌
をまいて。其乳ぶさをまいて。乳を吸ひます。この
乳首を。舌で巻くのじや。吸ますると。乳筒へ。縦
着が分別しるぞ。ナント奇妙なものでござり
ませぬか。其赤子がどうもせぬこそ。只大きう
なりましたのでござりまする。此のとき知恵を
貰ふたのでもなし。人から分別が出来たのでもなし。

りまする。たゞ赤子が成人したのなり。されば三十
も赤子。五十も赤子。八十も赤子。赤子といふ
かはりはない。赤子には私の心がない。私意がなきもの
じや。大人には私の心がある。それゆへ赤子とちがひ
ますと。かうじやと思ふよ。孟子も。大人とは其赤子の
心をうしなはずと。仰しましたぞ。赤子の心とは。
只私の心なきを申しますのじや。私心を
去るぞ。私意がなければ。我といふものはない。我と
いふものがなければ。只ひとつまりに向へまして

なまへ。忠孝がおのづからそなはる道理。この勤をしとげん
つけまし。先師がこの御世話を。なされたのでござり
ます。すなはちいろはうたにも
「我をすてれば悪事は出来ぬ。我よりおこる
ことばかりと。堵庵先生も仰られて。つとめといふ
の勤る。勤とはなにをさしたる。まり勤を志す事
はいかふぞ。それは我ありといふものでござります。おまへ
は嫁じや。おまへは姑じや。おれは旦那じや。おまへは
娘じや。おれは親と大事にかけてゐる。おれは

粗相に精を出してゐると。大願さへ。本間をのぞいては
ござりませぬ。たとへば人。往来に額を打ましてゐまして。
額を見ると。かうして頭痛がしてゐる。盡て法縁に
手を当てゝおまへども。見ると紀で虚がいたんでゐる。此方
はたち人が行ると志をのでいでござりませぬ。今下ると
つくかられませう。楊弓をひくに。師があらへぞ。カチリと
音がしたや。矢が届いたと人がある。志てまども。是しる。
的の真中に。中つたのでござりまへ。さうともつてく。的の
まん中に穴がある。これもふ行くると。矢でものがらず。

カチリといふ音もなく。こちの人がさてから苦の種じや。これを我なしと申ます。カチリくと音のするのが煩ひ我があると思しめせ。悲しき大道にまよふて居る人の苦を失ますると。する事なす事。身が幕へあさつく楽しきことのみ。気すがりよ。おそくと落て来ます。持となへものでござりまする。苦は須臾もとまらず。常に生ます。生まるると死ぬると若しむも楽しむも。我なしがする患。我まんならしぬるから思ふて。大安楽でござりまする。又人のこちを

失ひ申すと。生死苦楽。あるとも人が出来ます是を丁度いへば。いはむは徐々に尽をおぼえ。いはむとよつく類をおもひあるものでござります。このところとヨウ味はつてごらうじませ。兎角こちらぐみゆるまぬなり申さぬ。わかりもせぬ宝く。ゆめく死すとも可なりと。孔夫子の御仰せられまする。偽りではござりませぬ。ちかくとも。かしこいお人さ中々此合点なされぬ。聖人の道じやの。仁義五常のこちらじやのと。ぜんたいまあ道はいこちら

ごん。今の時節は世わたりが出来るとの歌。とうく
とこらくみなまではなしぬと。職多にもちらとこ
のむ人がおかそのじや。まちの荒トントはつくまく
めすせぬ。これまで法つくおうしいをまゝしがある。さる
とまつるに弁舌者がなく。行年よようべ。ちからを
このむ人じや。ひるとき一人旅と致されゆしさぞ。
途中まかねく。尾籠が重じやが。急な大便
をもよふしなつて。日ざしと見ゑバ四ツ半すぎ。つま
一トふんハつりいとう扶ゆめ四くのじやりしこま

てきものじや。大用に暇がいると。余所などの蔵を
損せうやたまらぬ。どうぞあきらく。用を便ずる
仕るゝは急な所と。ゆるくと往来をうんがくでもに
用とちがふゆゑ。大用は工面がわるい。とうくする
うち。ゆるゝし急にめぐくる。せんかたなさゝ。
あたりの野雪隠へはいりたさに。わいましに。
東海道まつりみなさい。是はつまらぬ。紙繋どる
るあると。大分のきらいがおきまる。どうぞ仕舞へ
なつ年うと。勧弁を巡らしたが。忽ち一ツの

竹(ちく)らと云ひはつて。それが細(しさい)ハ。時々(ときどき)広(ひろ)まへ。そこく
で憎(にく)といふ。又むかふの釈(しやく)で昼(ひる)丈(じやう)夜と。
二季三季の休息(きうそく)なり。ところが茶(ちや)の鉢(さん)も。
かうでもつて不動(ふどう)弁(ぜん)じや。そればかり終(らう)してゐる
僕ハ。懐中(くわいちう)の弁当(べんたう)をもつて出歩き。茶の鉢をも
いれど。二季中(どう)をともにせねど。自得(じとく)よいそこら
じやと。静(ぢよう)に出さ飯(めし)ととり出し。菰(こも)ござの
上に。まうへ。菜種(なたね)だらけと見(げん)見して。経(きやう)だと
極(ごく)らくでござりまして。極楽あまがた苦(く)ありじや。気(き)の

ござる手(て)が出来(でき)て。山蜂(やまばち)のたまご中川が。かの高僧(せうかん)
つれて飛(とび)こんで。大事(だいじ)の中をさしおいて。ひつくりかへつて
蜂(はち)めへ抱(だき)つかれ。手(て)ぬぐひの先で波(え)ぞえの焼飯(やきめし)と。ある
ふらち野壺(のつぼ)へとりおとして。又むつかしい。酒(さけ)くのぞん
くるしまぬが。横手(よこで)を打(うつ)ちやるハアこいつハちよろじや
をつけるナントおりにとふいてそんでござりませ
ぬか。ちよつとのぞきハなへ。焼(やき)めしをかくしておいて
喉(のど)をたゝし。腹(どう)を通(とほ)して。而(そう)して後(のち)のこへおくすのぞ。
ござります。それを出(だ)して手のひらへ。外(の)のたびへ

おとしとそのあまりハ。男と弦（つる）かどちらへちゝうら。此上（このうへ）の
忠孝（ちうかう）ハなんぞ。おやが大事（だいじ）の字（じ）どころじや。ござりますと。
忠孝（ちうかう）ハちうかうなまで。喉（のど）ところへ。せき飯（めし）が来（こ）く
なくなる。まちり度（ど）ハ出るぞや。本街道（ほんかいだう）をすかけまする。
忠孝（ちうかう）ハ出かふとなり。今までけの。をてうちしてへ。
お師匠（ししやう）さまかたり。立身出世（りつしんしゆつせ）のをてうちしまくる
山のかゝり。然様（さうやう）のちうかうしてたる。主親（しゆおや）の
家をおり出まし。葬礼（さうれい）の忠孝（ちうかう）してみへ。心中（しんぢう）身（こ）ゆえ
なげ首（くび）くゝり。これ迄（こ）の乞食人ならじや。縊

妻心（つまのこゝろ）てあらざりのくさふ へいぞずハめまさくまく
と旅人（たびびと）のはくるりあるて野路（のぢ）のむくさめ。あつらく
えんあわせと辛抱（しんばう）すると。時節（じせつ）到来（たうらい）のくるとのを。
より逆（そ）にも縁気（えんき）とのが多（おほ）い。綿蜜（めんみつ）よう黄鳥（くわうさう）。孝行（かうかう）丘
独（ぐう）ふとしまると いふく夢。面白（おもしろ）ひさへ浮くる小鳥（ことり）も。
身（こ）の大事（だいじ）いうまちさく。気ハとるや床（こ）添（ぞへ）いと
ころの枝葉（えだは）の出ぐつさ中まで身（こ）をおちて。せすまく
うふ村（ぞ）んでおる。こまハ弓鉄炮（ひこてつぱう）もとじうどうらくするの
なくなる石と老（えんべ）く。とまるのくござります。さるさ

よつて。孔子も此の侍を。御評判なされて。止まるに
およそ。其止まるべきところをしる。人として鳥
におよばざらんやと。仰ました。是ハ鳥より
おとるといふ事でござる。人として。鳥にさへおとるべく
これを激まして。志をおこさせ。我なしの場所に
やすんずるやうと。有がたいおしへでござりますと。
すべて鳥さへさうぞ。蜘蛛ハ。大風であみの巣
をとこに。狐ハ。西ふきてハ穴をふさぐとやら申す
へて。未然に其のふせぎをいたして用心いたします。人ハ

只。利欲のためにまよひまして。目の前の側
ことを志つけども。後の事がなけれバ。何かなきも
り分の安楽のみかんがへて。出来る事を。なければ
事をばなさぬ相応に。無理な働きさせることを
ますと。其実ハ。わづかひとつの一ツ。摘一ツ
ごみするを。時節相応。さなければ。肝要のものハ
出来ませぬ。心学をすれバ。何を知の事を。聲音
するのでハござりませぬ。なる事ハならぬと思ひなさる
ぬ事ハなさぬとしる。故に。家安楽にござります。

此安楽とせうとおもへば。本心を志るが始じや。本心と志れば。無理は出来ぬ。本心を志つて。無理をする人が有ろう。そこは本心を志らぬのでござります。かく申せば。わたくしが無理せぬと。無理はならぬやうに覚へてまいるとも。中々さやうではござりませぬ。爰らが憂うく聞くと中々。かう心得て。無理をいたします。さまざま法にて今ひらき給ふありてこそ。私の申すことのが。死んで。極楽へまゐりましよ。観音勢至が出むかひなさるる。申すわ

孫隠如来のおまへ。つまらぬ事おなされしと如来のおつしやつては。向後ともも。極楽の仲間いりとするものなれば。思ひつくの申すともつれ覚てしてくおかみおくかぬ。今日はまづ今年をおさがよいと。観音さまに安養内を御釈しまして。観世音菩薩かの亡者を呼さ。それこそし極楽の仲間となせなさる。大勢至菩薩ともにおどろう。天人の舞楽まいら。八功徳池の善のなすざうり御殿頻伽のさへづりは。うぐひすようとおもしろく。

かやうなことをいふと聞きますから。一の堂へ御案内申さ
まうさ。されば娑婆の蔵の中にあまたの四方ま
掛とつゞけしく。醜しいさまげ。数の手がつまりて
かゝるそれ百味の飲食を。調進する御台所と
よひ。観音さまを申すには。御仏
達の食物は。なりますの死と申します。いやく
あまいはきかしげではないぞうまるく何ぐござります
る。されば。なまれ人娑婆にかゝりしとき。父母孝
の縁を繋ぐ。実をと思ひまさ。浅

宗くはかりござるとおもへども。身につもるところの不孝は。
悪事をおかしたる者が死ぬると。かならず無間
地獄へおちる。爰からは極楽へまゐります。かまへて爰の
仏になるものじやと。仰られます。さてまた文おそろしや。
ら。爰の千物はきゝ伸しさる。かのうずれ子は極
楽は不死会するもの。あまへぞうしさまで
ござりまする。観世音はかぎりなきほとけ。めでた
う存。極楽は腥いものが。なくて結構なりの
殺。あまいうずの子でもござい。娑婆であるところ。

口に忠孝をのべ。人を教刑し。世を経綸と経く。
人を済度し。志をとその究は。気ざへ盛まうくを
そうしく。そんな事せんが死ぬると。かうごは忽ち地
獄へ出さ。否だり極楽まゐりする。かうでは否の
千物じやと。御しまさ。ナントそれは話くはござり
ませぬ。私どもは。否だり極楽まゐりする
途中他にまるうするをうかくされ。耳だぶり
極楽まゐりける。お仲間うらしじや。御法のは
いなりませぬ。歳ん上手の。おうらひ下手。に

ぐらりの総かしらで。尻のなんまんてまつさりの
じや。竟彙の御代とて。揃んでめでたも。伊邑
の出来るその出来さへ。延喜天暦の聖
代とても。只酒のんでおかしとおかしも。
こゝにまひござりますと。聖人の御代わじと。
家業に精出し。正直にせねば世はわうには出来
ませぬ。お夫ふ今日。とうでとても御代に。生れ
合せ。乱なう指籍の恵もなく。山家の隅く
海のそしぐまでも。かひとして不自由のまゝは雑

御上様の。御仁恵をかうむり。世の人々その冥加の
ほどをしらば。分限をまもりてこそ。身を止るべき所なり
これまり大切な御法度をまもらずして極悪
労をうけてまもらぬ輩が、いふべき事ども無頼がなり
ますとかしこき御上より法度をまもらぬ者が出
来ると。御上様の御存じなく捨て置かるる事の様に。御憐愍
なりと公事訴訟。多くのあらそひの事ども。訴訟
まじく慎みをもよろしくするとは。此所に止
いふ人は家来と。主人の家来をもとめやまし。

子を親に不孝親を子をいやしこぼし。世間の人と云ふ甚実
に伝へたる。ほまれが。お互の此所じや。扨此場に
とめたちず。御座まで落ちて切らせば。ひとつの
薬種は竹の杖まじくはるかに落まする土地
の方々皆は気をつけて。時節がよろしい。鬼つらの
ころのしるしを信じてそれもしろ。親の罪なりの
家業を切らずに。時には料を預けよくすみ
ぞ。家業に料をあつかひ。我々も進まれると
すれば。天罰はのがれぬ。ただ家相も方角も。うま

ちゑと申スのではござりませぬ。そも〳〵道理(どうり)の
ある事なれど。不仁算用(ふせんさんよう)しらげる人。心乃
事じや。家(いへ)のたちを分。先のかんしんじや。よ
心がゆがんでゐては。人相(にんさう)がようても。家相(かさう)がよう
ても。方位(はうゐ)がようても。なにも叶(かな)はぬ。内(うち)の事は
をかう良薬(りやうやく)をのんでも治(なほ)らぬ。人相がかはると
いふて。ゆがんだ鼻(はな)が。直(なほ)ら直さうものでもない。
結(むす)ぼるも。心のもて直しさへすれば。悪い顔(かほ)も柔(やはら)
和(わ)になる。下賤(げせん)のすがたも上品(じやうひん)になる。只(ただ)大切なは

心のもち様(やう)じや。わが友(とも)がもつて居る人。商賣(しやうばい)の
手捌(てさばき)る。なぐさみに。面(めん)をたくさんもちましてとさ。或(ある)
人の子が。けいこは顔色(かほいろ)もようござらず。なんぞ能(のう)の
うち事はないかと。留守(るす)にとく。のぞいて合点(がてん)がゆかず
さうに能(のう)をさせて見(み)ればござりませぬとよくよく見て。しん
申しござらしく。拍子(ひやうし)ましてから。其のちに珍作(ちんさく)
ござりまして。又面(めん)を附(つけ)て。さまさまに舞(ぶ)うて。人へ。道楽(どうらく)
まで来(き)てかせまして。ものずきさきの事とおもひ
出し。けれども顔色(かほいろ)は。いつまで飛(とび)ましてもなりませぬ。その

人らち気しく。むごく柔和ぞ。おさなし顔を
とれ。おそろしひじやとつけ候。御じし汁とさ
たじめく心付ましさへき顔の。恐ろしと
いふましときれ鬼の面を作つくみさ。汁面を
作つされ。かまへど畫をらひしぞり。眼をいり甘ぞ。
こゝろまさるご業しく洁る。まんわの顔
色でいろうま。恐ろしうみとくものとみえる。そ
まさおそふくの面をはるる。ものいうまと。柔殺を
やふく。作る由ゑ。わが顔を。おのづから柔和なり。

みてきとのとふみてる。さるてもんい。ある村のとの
じやと。わがうりつてさ候ましさ。こればくヨウお巻
あされませ。古人の御さ。一切の法ぞ。一心の文
名ありとらふてある。心をけそて。制よとおべき
はるまい。心を正しうく家業を精出しく。
家相も人相もみんくおのくひなさ候ませ。休息

續鳩翁道話

三下

續鳩翁道話三之下

男 武修聞書

「梟(ふくろう)のせくをかつると跡(あと)そんく。されどもみちへまゐれざりけり。ナント有(あり)がたい歌(うた)じやおざりませぬか。牧(まく)たきのおさんどんが。目(め)をとまりく。今(いま)の前(まへ)ぐ火(ひ)からカチく。ひとさ名(なま)がある。わしは大和(やまと)乃新口(にのくち)村で生(うま)れ。藪原(やぶはら)の。次郎左衛門後家(ごけ)の。むすめじやとをおかわど。生(あれ)でうつくしう要(あ)じやら。さつぱりと行(ゆき)とまい。されども忘(わす)れはすれざりけり

そんな手茶がまの下がりまする。是どのが。神の棚乃
まへ。どんがめや鯉鮒をよぶやうに。かしこ手
パチパチ。けふとき金をもうしいものがなき哉。百年
目をらせぬ。手で目を持せぬ。立ておらせぬ。居つ
くおらせぬ。これどもみちには足をぞりぬり。髭もか
ふらもない人が。子孫長久富貴繁昌といふ。
何がいふてござりますものじやございませぬ哉。わざわざ
晩まで我まして勤めてござる。楽をものじや。
主を主君に止まるとやまぬと。主君も止るし

ねべ。何ぞ主君らしいものがなき極はおかえ窮
屈がつくこと事もやがる。主君はそんなに。いそぐ手
をはやき極をのぞんではない。あすこそとの。日がな一日。
何ぞ分ごろ何ほう仕くござる事が。皆主君の御さしじや。
剣いふと。其や合点する人はそんなにおまへが。おやま実
うのとぞくらうのを皆主君気と。おいしやらう。
さらうまれうれ。立合ぬ。主君は何をおがえんませぬ。
我なしのこゝろまいじや。ぞくらうかうか。山実のは。
ままなしでは出来ぬ。人がつんけはせぬ哉。常ていね

ぬ私。内の芝尾へござりましたし。何れ志しど。若い
ものをりまするひなく。ナント気若は止まりませぬといふ
ものは。店屋ありのではござりませぬ私。何は何も
なりませう。気若じや。何は給めるをが為にて我物し
ではござりませぬ。どうぞ御機嫌よう。一日泊まりして
お勤なされませ。楽みをいふのじや。此我がすると。ようう
つとめさ人がある。扇ふおたのしみにまよう越お
の國。大野郡。大野領西市村といふ。此御城下を
たのみまする半。中石だう。高八石あまり。持

御ざる。治郎右衛門といふ百姓がござりまして。女房
それから女のまゝ。悴一人ありまして。名を治太郎と
申します。親子さしむかひで。農業をつとめて。
居りまするうち。親類よりとこの治太郎へ嫁のせ
話をいたしくれるものもござりましたけれど。治太郎。
合点いたしませず。その故へ。次第よりいたしまする
親のおなまぎで。せめて仏づかひを。受ね捨いたし
ふへ。他のひとめとりしてで。おく親の気ふ。いらぬ事
がるても。義理あるまぎで。辛抱も世話がなければ。た

すれば親に苦労をかけぬ年もなし。まづ女房へは
ますまいと。かく申せば親孝行らしく。親子ら
されましたナント私どもへ志じやございませぬか。是
に引かへ世間では。年の内からうちかち女房とお
ふたり。百文の銭をもうけるすべを考へど。親の
お蔭じや。ひとりは目せねど己が力と思ひ。口に
ひとつ稼ぐほどの。手覚えもなくてもそ。なんぞ家
業には気にいらぬの。ごんな始末でなければ。それぬのに。
小供八百いひちらし。不孝な子もあるのに。此

次に申さうなら。親の心を安めうと。女房ともろとも
へつらふては。是は志じや。さりながら。なんの銭を
やすとの。けちな玉子に出まするぐ。おるのごござる
ますと。さて父の次郎右衛門といふ者が。さしる
人じや。なんでも年八十あまりにおよぶ。老に及ぶ
しや。たとへ志を不揃になり。ぐく小児の様
かなしきましし。たとへのふかふ。八十のこと母とや
年寄り。ぐんぜのたい志をもち。九十六才まで存命
せられました。すぐ此十六ヶ年の間あそぶ。行とき

わたしは親にはなれて。一度もそむかねど。夫には我まゝの
不行状。その一二ヶ条をおしらせ申しませう。あるとし
の冬。みぞれのふりまする日。江戸の必用
ありて。御城下の御宿。油屋何がしと。いふ所へ
参りまして。其夜何がし。次右衛門が形を見ま
もらふ。此義かくしもせず。半道ばかり参りて。こぞまより
うけて。あとをおひましたれば。夜叔は悪くはぞふぬまゝ。
其の大におどろき。今朝よりのこぞまで。何田兵衛。
このことを若くへござりませぬぞ。若き雲気にかゝれば

いひぐせして。ぶら夜叔とぬかしやまで。ひにはおわびて。
くぜかせうと又。次右衛門の気ひなる。江戸へ通
ならるゝは常のすじや。親どものいひまする事は。絶て
しませぬは。おかげで雲気も身にいりませぬ。出
がけは此養子の用意をいたしましたが。親どもが。い
ふさくには。此天気のよいに。此義をとこるへんが
わしへ。やめよせうとやうにまして。実田忍に。此義かさ
さませぬと。何気なさ仕まされまして。此半は
油屋何がし。私へ迎ふとすでござりまする。もどくく

忠孝の人は。寒暑もいとはず。身を働かせて出
来ませぬ。怠りなまけは。常に精神こらしておく
のすきがないゆゑ。寒暑もその虚をうかがふてつけ
入りませぬ。弱くども。絶えずそろ〳〵ひ。怠りて
根をもとでと。絶えさず。大鏈は寄りすさるの風を
招せぬ。そうへ居るは火鉢をたてゝ。間をおいて
かつと名づけて。恐々に暖気をこしらへ。割
酒とのんで。昼寝をする。あまぞれ寒気にあたる
様ななられ者じや。そうへよ。閑思雑念で。気を

中づり。透間から。ずん〳〵。滅多に湯気とう
ちんごをのぼやなよろく。立居する指子上。温湯へ
陰を伸ばしかけのすきますぐ。寒気をうらへ引
いをまするを。支ころ肩がこりやら。頭痛がする
やら。歯がいたむやら。難なく。痔の病痛となる。
とるのごさいへ。半じや。わるくいへども。年中
うかうかとして。すくのをましきさ。御
用心なされませ。忠孝はまつすぐなもので
ない。頭一つかくしても。尻が出る様じや。

どうでもお勤(つとめ)なされませ。又なりとさ次郎吉が業(わざ)稼(かせぎ)を売(うり)まして。金三分(さんぶ)をうけとりて。て親(おや)りみせて。是が業(わざ)になりましたと云。父(ちち)はまことくしく。至らぬ分歩(ぶ)。お主によく似せと云て。ハイとうて。金子をわたし。さらに其子細(そのしさい)を問(とひ)ませぬ。父(ちち)は金子のうちを財布(さいふ)につゝみ首(くび)にかけて。うちの馬(うま)が存分(ぞんぶん)よろこび。此金子の金を。あの馬(うま)に見して。揚句(ぞくぞく)よく請(わ)く。よく馬(うま)を仕(し)くへて来(こ)うと云。次郎吉は大ぶによろこび。ホンニ馬(うまが)かよう

御しこ。ごくらうみがく。よい馬(うま)を。お仕(し)込なされて下(くだ)されいとや申されました。実(まこと)は小百姓(こびやくしやう)の事(こと)なれば。馬(うま)をもち(持)は。いたしませぬけれども。父(ちち)が馬(うま)をといへば。其心(こころ)に志がつくる。馬(うま)と云。さりとて一存(いちぞん)も答(とう)ませぬ。業稼(わざかせぎ)代(だい)。金三分(ぶ)あれ。小家(こいへ)ではいかく。大切(たいせつ)の金(かね)でござりますれども。父(ちち)の望(のぞ)むときされ。明日(あす)の事をもいひませず。ただ父(ちち)の志にまかせて。一言(いちごん)も口(くち)ごたへといふしませぬは。いかく稼(かせぎ)い事(を)では。ござりませぬ故(う)。さて次郎太郎は。老(おひ)まして ほめ

さま。わたしは達者でござる。かの卜占の運をとく。
杖にすがりて。御縁下へ出おはすこなたと。古乞食
屋をとらはるさへいしたが。武家にて。冥加金のうけ損じ
あらはれ。卜筮のそんじやうをみなとり。出陣をとる
ゆゑましきべ。此家のあるじんざるのよろしく若い
代金卜占なりとやしましたで。次郎左衛門よろこんで
卜占の金をわたし。かの卜筮とさうさとおく。
家をゆりコリヤく次左衛門よいこのとりあへず
さ。このをつんさい出してつんせる。次左衛門これをこえて

是へよつものを覚えなされました。次郎左衛門驚いて。
気をんじられ心を起しておくと。お若のあるとき。
まことにおのれとおもひて宮てきたる左様なら。めりや袖やへ
ゆりませう。それから仕事に又此卜筮はくるりとを
入て其方が腰をさげてわると。周へ行きたときは。
まんとに様子もいたく折て。ありまき合ひとありして。
からく来てといはれました。次左衛門落涙して。きゝ
ござりでござりまする。ヨウ気を付て。宮てく来て
ありさくと真実に慌てまてとおはしやすんで

此次右衛門。老に孝なる父につかへ。更に父を老
に仕ゆる人とせざ。何故なれば。其親にむかへば
親なりとして我といふものをふくむべき道を立す
世話もござりませぬ。此一条古人のいひ出す孝子に
私のふかかしと いふは。これほどござりませぬ。され
ば治左衛門の孝心。人を感ぜしむる所なりけりや。
あるかふ日がさりまして後。かの右五郎兵衛が孝心の
ほどをつたへきく御してなみだをながし感じまして。
ひそかに郡代の命を持参し。奉行法のよし

ぞさりけるに。見聞しける五郎兵衛を乞ひもどしてく
御りけしさと。うけたまはりまする。又ひそく世 朝の
はじめ。父の治郎右衛門が田を見まはりに。出
ましたる。餓にかかりて声ありあそばして余所の田に
こか苅入をまつさのふなぜよその田を苅るのじや。
たかり往く田をかまいて。次右衛門。こころうけ
合ひ。この五郎兵衛がおしまして。ドレ往く苅る
木手せうと。猿を縄にさいて出かけましたる。駄籠に
苅くりどり申して。父右衛門用ひよう苅て十束と。

一順のきげんがわるいと申すゆへ。其の時
まで持のかしめ青田ござりまするを。一ぞ
も銭をくれず。親の手をゆるして青田とう
き来ましたる人々が幾内せぬ。そのわけ
なりことを申す事じや。宮まめづらしい孝子で
ござります。親方の所。此方の行状申しく
一夕二夕ならば申されませぬ。中々を耳を
かたらうと行状つまの一ツおそらく申しませう。
父母存命の中し九十なまりのときの行ありひま

う玉。次な隣の人ふり悪う。そちが月代はとつう
延ばしゐんぐりしいふしずりくかせが剃くや
らぬ剃刀を合せて。おゝしうと申されまし
た。次にいうこうはそのいうまうの頃へ。つぞうし
さふ私御びんを髪月代もりしませぬ是は
ありがたうござりまする。いで剃りをさりませと。
剃刀をとり出し。能とぎてそかへしに急分は
ゆるく。さかやきをすらせば。父をまの膝を叩
いて。手を枕させとて。一パイとつて横になり。

父の膝を枕としてすこしも恐るゝ色はござりませぬ。さて此むかしを殺しまするを。中々狸爺とおもしやる方があろう。夫は孝子といふものではないわいの。大徳のとふ人のじや九十にあまつて。老耄しらる親に。剃刀をわたせると。いふ筆者がありともの事。わし親の身に。髭が生へてあるとするぞ。御さおのまゝが身よいやまちがあつてはどの命をとらく。親を害ふぞ中々孝子といふものでは御座あるまい筆者は。せねばものじやとおもしやる。

悖乱でござりますと。さりながら大舜が。御されは孔夫子が此段御申なされた。さればこそ常に賢さうやきを立流るしく加様な不躾のくらべと。皆々指をさゝえまゐらせる。此部はうられてお茶をよまね。百姓一むさの人のまへ出てはまでいへどさませぬ。去し此理屈は手紙の時宜そのくさのわやうを志らぬ人が。愛のつくぐ。分別しくいふとじや。かへし。理屈ども兎角。その知恵ばかりひがあつて親のこゝろに志たがふことが出来ませぬ。

この絵(ゑ)のみならず。すべてこれぞせう。恩徳(おんとく)と申さう。
およそ工面(くめん)がありませうとも。前後(ぜんご)に左(さ)がつき
謎(なぞ)。ゆゑに親(おや)の字をもつてます。孝子(かうし)は親ある身を
あつく我身(わがみ)を知(し)らぬ。晋(しん)の王祥(わうしやう)が。氷(こほり)を
たゝいて鯉(こひ)をとりあげ。呉(ご)の孟宗(まうさう)が。雪中(せつちう)に筍(たけのこ)
をぬき。後漢(ごかん)の郭巨(くわつきよ)が。子(こ)を埋(うめ)ころさんと欲(ほつ)し
たことなど。今の人はかんせいなさうが。気違(きちがひ)のやうに
おもひませう。是(これ)はまア。親(おや)は鯉(こひ)がたべたさいと。
おりふし申されず。氷(こほり)をふむのあやうさを知(し)つてぞ。

親(おや)は筍(たけのこ)をほしがらせるといふ。云(い)ふはんなりて啞者(おし)と
なするぐらゐ。是(これ)みな古今(こゝん)。孝子(かうし)の常(つね)でござります。
日月(じつげつ)はいまだ地(ち)におちぬぞ。神明(しんめい)のちかひのあらたか。
孝子のこゝろざし。感應(かんおう)のまゝとはいふ事はご
ざりませぬ。わたしは次右衛門は。父を老耄(らうもう)せし
人とは生涯(しやうがい)忘れぬぞ。さうふようく。孝養(おやよ)さと
志(こゝろ)ゆるのうござりますと。此(この)志(こゝろ)ゆるのが。中々
常人(つねのひと)の。およびもないことでござりませぬ。志(こゝろ)まゝべとゆふ
く。親(おや)が道(みち)をしよめくのよう子が蒲挑灯(ちやうちん)をちと

まると。孝行じやと云のでハござりませぬ。幸ひ
おたづねゆゑ。加古川の妻子に出合ぬれ。ありがたふ
てござりますと。さらば父の治郎右衛門。ふたゝび手に
剃刀をとらぬ。治右衛門が左の鬢をそれらと。竹の
苦となく。ゴツくとその落し又もそ手絵と
摂なぐらさそもうつくしう。めぐり又治右衛門
も又。自らなそく。ホンニうつくしう咎ましたと。
親子とろとも。うち笑つて居たるとき。庄屋
行うじ。都へ用事ありて。まわりましたが。

此体をみて。大はおどれ。その子細を問ましたれバ。
次右衛門。ありのまゝに申しまして。親つさ平
生ふうらずと称ふりました。それがこまかの
祈状ぬ孝く。御代官様の御耳にまし。御褒
美として。御米おびたゞしく下されう
しらべ。佛境にまゐをつかへ安く。おのづから
不孝の手代も。かたま切状をもちあかし
ましたともござりましたと云。半
じや。彼くいそく。徳孤ならずとかやす隣

たりとの厚徳むかしかうど。此西市村ハ。小村
にて。家数もわづかに十五六軒あれども。孝子
順孫。おほく出たるところなり。今の文市
長兵衛なども。御褒美頂戴いたしける
人なり。此者も耕作をつとめて。おのれもよく
その父の治郎右衛門九十六才にて。病死いたしけれ
ましまし。治右衛門もそのゝち。甥をやしなひ
子としていたし。その身も生涯無妻にて。長寿にて
くらし候ひし。寛政二年。すでに年七十才。

その名前の太守様。とてもの御仁恵にて
老人ハいたはりとして。此節御中へ出府ある
ことに六十五の老人を村々よりかきあつめさせ
さる年がござりければ。古市村よりも西市村さる
村役人の御中へ治右衛門をめしてきたしと
つねにまかりあるか。治右衛門さしてふ年ほどとか申
ませぬ。御家老へとよへかう納まかりて私の
年ハどうもしおそらし。村役人もこまり
此女のおん。御代官の御墨付まつき。出府

代をゆづられ年よれば。有がたい事じや。孫も年
をかさねて及ばぬ。あの体にいたし置て。孫を
どうぞ決定して一向承知せぬと。何ぶん年をとりまして
ござれば。御免にあづかりたいと。ひたすら申ますれ
ゆゑ。拠なく随(？)くこのうへ。御老役へ此のくわし
て。終に御役人となり。御吟味あつて。御目見
としを申されぞ。めつた申さるまい子細あるべし。と
子細を申せと。御合せになりまして。ソコデ深き事つも詮
方なく。ふたゆへ年の申されぬ。子細をと申

上ませう。私親次郎右衛門存命中わたくしへ
申ますのには。その親方がとしよつたるとも
親どもいたしまするそちが早ふ隠居のおすまゐる
のと年をいふくたるとは。おまへいはれう。仏(？)がうそう思
つうらくたる(？)うしろを(？)いふてくださるなとて申されまし
た。親どもお引退ましく。年月へ立ますとも。や
されましたるとへ。御年のそこふ。隠まして。その
ゆうふ覚まするか。それしか仏壇まゐりて。ござ
るゆゑ。なんぼう御上様のおすゝめで。これにそうらうべ。

御らんなされて下されと落涙して申されけれ
ば。是をふかく此時御耳に達しまし
てまたび。絹の女が御感心あそばされ。其せつ文。
御褒美と頂戴仰付られ。末々繁昌あり
がたい。物かへもなく。ござりまする。毎年大郎は
身を惜まずして。父母に孝をつくして。又ましたるが。
この西市村の治右衛門が家は至て人となく貧
らきます。これは浅いくおかしいところがある。その
所は不孝な息子どのがあるに。母めのことにあるぞ。

ともござらぬ。其のごとくづく。遁世のかくへ行状
を聴聞に。つまさく申されて。其夜の道場へ行き
も。武運に。孝子がないて。民まづしく。思うて親
子とも。大病によりあひ。らうがい撰く。され年に出家
ねども飢死すとおもひ給へ。所は孝心の功で天の恵
み。おりしや。孝の誘いが。かる月世のうらみを
うらく。かの孝子のまゝゑさ。ふつくす
おりし。孝子なるに。古今にもあることよ
ちどめとしくりしふたらず。終にけるをとろへ。

薬をとりとめ。看病して。剰さへのこらず金をえんりよなく
く。家をおこしたる人。かの孝をとめ。大きに
感心しく。なかそ居ました。肉へりだろく。ちく
母やよいなく。おまへもこまつて孝行するかとどり。
梟と云ふ鳥は。つくあるくれともな。母おやよろ
こび。孝行は嬉しいが。其梟は物よきるのじやハテ
さて曽てごろんとなす。仇がし忘るる事じや。
それでも。梟が。孝行になりさうな事でござりまし。
する此果のたそのことも。其文いたせど。ハテやかまし

いふこの梟は幼少いふて。孝行も出来るものじや
まい。老くろ手ふ志へのじや。此く思ふてござれと
いへのは。母親もせんかたなく。ふびんなと思ふ頭より
て来た。ソコデ息子へいうまでもない。居だてとめて梟
をよび。酵をかりおぼし。コレ母者人そちら向かしや
と。脊中をまつて中よう。イヤくるしい。肩がつかえた
せめ。又ころを小手をもつて。だまつて肩をおさへしや
ると。手を握り臂を肩をさする。梟がうしへのしくと
酒のんで寝て居る。ややしばらく。二十日ばかりたちち

孟宗が大雪をほつて。其さまでのものじゃと。毎
日までども。おしかるに不孝ものゝたちに気をつけら
るゝそれは自の心からの孝じや。あまねどもは孝行する
のが。おのれが身よかろしぬれ。よいのげんは聞てさます
と。孝とつたへて述懐して。孝をこ家のぐり
あさ孔ある日。土のうつまうをほつて来る息子
は悦び。これぞおやの孝うまるじや。小判で
つうれ。わが本全でつうゝかと。碑をみてれが堂
聞が出る。不孝者ぬをはぶし。ナンボウ何節掬

ぞと。せめて老來が一ぱいのみたいものじゃが
しさるゝ抔じやと。かるく針くれ叱ますれが。孝をも
かんしやくに障るゆへちさな口喧し。ベツカコウと
帰ましさナントおりふしはあつて。ござりませぬ孔
家業もせずして。今のおしへのことくは身持ぐ
よいやうなへ嫁入が来てはの。好んでおくうまい
そのうちには。博奕うつて盗ゞまさいのと。そ
んなこと。ゆくへはま ベツカコウはかの連中じや。
しよう分別をめつらしくどうぞ二合の佃り

とゞまり。我なしぐ。おつとめうちくれませ。あゝ
人のうらみ。「よしとりんるをひとつしをまねき
江れ。おしうるかへふらつゞすとげる。けとれ明ぐん
おもむしやうしませう

天保十一庚子年

書林

江戸

茅町二丁目 須原屋伊八

日本橋通り二丁目 山城屋佐兵衛

芝神明前 岡田屋嘉七

日本橋通り壹丁目 須原屋茂兵衛

京都寺町通松原下ル 勝村治右衛門

寺町通五条上ル 天王寺屋市兵衛

大阪心斎橋通り順慶町 堺屋新兵衛

天保十二丑年

書林

大坂心斎橋通順慶町　柏屋新兵衛
寺町通五条上ル　天王寺屋市兵衛
京寺町通松原　勝村治右衛門
日本橋通[illegible]　須[illegible]兵衛
同[illegible]　岡田屋[illegible]七
芝神明前　山城屋佐兵衛
日本橋通[illegible]丁目　[illegible]屋[illegible]八